

[010] 文獻探究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10119>

出版情報：文獻探究. 10, 1982-09-15. 文獻探究の会
バージョン：
権利関係：

編集後記にかえて

わが「文献探究」のそもそもの始まりは、決して、研究論文を以て学界にうって出よう、などという大それたものではなかった。いま探している本とか売りたい本、あそこ、の古本屋にこんなものが安く出ていた、とか、どこぞの図書館で新資料らしきものを見つけたが車攻外のこととて手も足も出ず帰ってきた、とか、そんな類いのことを仲間うちだけに知らせる、いわば九大国文学科研究室内の情報誌のつもりで発表したのであった。「文献探究」という立派な誌名がいつごろできたか、よく知るところではないが、もしこの段階ですてに用意されていたとするなら、「探究」の意味するところは、その程度のものであったのだ。

わが「文献探究」が独り歩きを始めたのはいつごろのことか。学界時評で採り上げられたり、見知らぬ人から購読の申し出があったり、学界の二次会で話題にのぼったり、もはやタウン誌的発想ではすまなくな

っていたのである。驚くなかれ（と言ったところで驚くほどのことではないか？）、かの国文学研究資料館では、所蔵逐次刊行物全二、四五〇タイトル中、最近号が開架される重要誌六〇〇タイトルのうちにはわが「文献探究」も入っているのである。これはひとえに、毎号すすんで寄稿して下さった今井・中野の両先生、および物心両面にわたって応援して下さった諸先輩、さらには毎号きらんとお金を払って下さる定期購読の人たちの力に拠ること言うまでもない。おまけに、森鏡三・市場直次郎といった、われら会員とは直接関係をもたない高名な先生からまで玉稿を戴くという榮に浴することができ、いややうえにもわが「文献探究」の名を高からしめる結果と相なつた。そこであとはおのずから、われわれの努力、ということになるのである。

わが「文献探究」はいらおう会員制となつてはいるが、ゴルフのそれのごとく閉鎖的

のものではない。広く募る体制は従前からあったのである。「原稿募集」と書いていただちに原稿が集まるなどと考えるのはいかぶりも甚しいが、しかし、「拙いものですが」という謙譲の美徳も、これまたわれわれにとつてなんの役にも立たない御題目ではある。

わが「文献探究」も今号で満五年である。この五年間の足跡が実のあるものであったか、なかつたか、その結論は、恐らくこれくらいさきの五年間にあるのではないかと、という気がする。

(白石記)